

環境・地域・人にやさしいベジート

経営トップ講義

@県立大 2019~20

「ビジネス経済の実践」要旨

⑤



「『平戸でもできるんだ』というメッセージを、地方の人に示したい」と語る早田代表取締役
＝県立大佐世保校(山下哲嗣撮影)

アイル代表取締役

早田 圭介氏(54)

野菜をペースト状にして乾燥させたシート食材「ベジート」を製造、販売している。1998年、熊本県ののりメーカーが作っていた野菜シートを見て鳥肌が立つほど感激し、事業を始めた。しかし当時は価格が高く、おいしくなかったため売れなかった。

2005年から長崎女子短大の食物専門の先生と共同開発を始めた。紙を食べているような食感から、パリッとし

た食感に改良。今の原形となる商品が完成した。06年、生まれ故郷の平戸市に会社を設立した。08年、日本商工会議所主催のビジネスプランコンテストでグランプリを受賞。10年には米ニューヨークの展示会に3日間出展し、約2700人

が試食して好評を得た。商品を取り扱いたいといってくれた会社も180社に上り、海外でも人気高いことが分かった。国内でも大手のりメーカーに味を認められ、15年から業務用の販売を開始。現在はイトーヨーカドーやイオンで販売している。

食物繊維が豊富で、野菜の成分もほぼそのまま残っているため体にいい。原料は野菜と寒天のみで、賞味期限は2年。現在販売しているのはニンジン、ダイコン、カボチャ、トマト、ホウレンソウの5種類。さらに25種類の開発に成功している。野菜が変色しないよう加工するのが難しかった。この技術で特許を取得している。30~40代の女性をターゲットにしてきたが、野菜が硬くて食べられない高齢者にも喜ばれている。シートを水で溶かし、煮沸した後に冷やすと野菜の寒天になる。飲み込むのが困難な人や、乳幼児でも食べられる。ゆりかごから墓場まで食べてもらえる商品といえる。

目指しているのは環境、地域、人にやさしい事業だ。原料は市場に出回らない規格外の野菜。食べられるのに、割れるからといって、畑に捨てられている野菜がたくさんある。それを農家が喜ぶ高値で買い取っている。スーパーで売れ残った野菜も原料にできないか、検討を進めている。平戸市は人口3万人台で、少子高齢化が進んでいる。農林水産業や観光業は頑張っているが、製造業は元気がない。今は流通網が発達しているの

で、いいものさえ作れば、世界中に売れる。「平戸でもできるんだ」というメッセージを、地方の人に示したい。海外への販路拡大のために、世界中を飛び回って営業している。23年には東京証券取引所の新興市場マザーズ上場、35年には売り上げ1千億を目指す。(湯村高大) 次回4日に掲載します

平戸の製造業を元気に